
出来事名詞を量化する副詞規定 Mal/mal の分析： Gelegenheit を中心に

出島 恒太郎

1. 序論

ドイツ語の Mal/mal には数詞と結合して、時の副詞規定 (Temporaladverbial) および頻度副詞規定 (Frequenzadverbial) としての用法がある¹⁾ (例 ein + mal: einmal ; drei + mal: drei-mal)。名詞用法、さらにそれに基づき前置詞内に生起する固定された用法も存在する (例 :letztes Mal; zum ersten Mal)。本論文はこれら周知の用法に加え、Krifka (1989) や池上 (2000) において既に指摘されている Mal/mal の名詞を量化する用法を中心に論じ、この名詞の量化は、副詞規定による文または動詞句の量化との一連の議論を参照することで説明が可能になることを主張する。

(1) Zweimal zehn Pfennig Briefmarke, bitte.²⁾ 池上 (2000:144)

(2) zwei Mal³⁾ drei Barren Gold⁴⁾ Krifka (1989:19)

two time three bars gold

本稿の仮説は、Gelegenheit はある種の出来事 (event) を表す名詞であり、回数副詞規定は広義の出来事を作用域に取るというものである。この観点から、最後に回数副詞規定「数詞 + Mal」と「数詞 + 複数名詞」が単純に存在物の数を意味しているのか否かをそれぞれ比較検証する。「数詞 + Mal」の例である (3b) は、一見して副詞規定表現による動詞句または文の量化なのか、名詞の量化なのか判別がつかない。一方 (3a) も一見単純な量化表現 (数詞構文) であるが、

1) Kluge (1975:456) では、-mal の記載に „aus mhd. ahd. *māl* n. ‘Zeitpunkt’ (s. *Mahl*³⁾).“ とあり、Mahl は、Mahlzeit (食事) の他に Zeitpunkt (時点) を意味したことが示唆されている。また、同書によれば、名詞の Mal は、„n. Mhd. *māl* n. vereint die Bedeutungen von ‘Fleck’ und ‘Zeitpunkt’.“ とあるように、中高ドイツ語の *māl* は Fleck 「斑点」と Zeitpunkt 「時点」の具体的な意味と抽象的な意味を併せ持っていたと考えられる。

2) この言語現象は池上 (2000) において「モノのコト化」という説明がなされている。

3) これは、Krifka (1989) は (Zähl)adverbial ではない Mal/mal と見なしている。

4) 原著 Krifka (1989) の例文 (56)。

Gelegenheit は抽象名詞であるため、意味的に単純明快な現象とは言い難い。

(3) a. Für die Bürger gibt es gleich **drei Gelegenheiten**, sie bei Podiumsdiskussionen

for the citizens gives it soon three opportunities them at panel discussions

miteinander zu vergleichen.

each other to compare

‘There are three opportunities for the citizen to compare them at panel discussions.’

(www.haller-kreisblatt.de, gesammelt am 28.03.2018) ⁵⁾

「市民にはまもなく、パネルディスカッションで互いを比較する、三つの機会がある。」

b. Für die Bürger gibt es gleich **dreimal Gelegenheit**, sie bei

Podiumsdiskussionen

for the citizens gives it soon three-times opportunity them at panel discussions

miteinander zu vergleichen. ⁶⁾

each other to compare

「市民にはまもなく、パネルディスカッションで互いを比較する、三回の機会がある。」

(訳・強調筆者)

本論文で中心となるのは、出来事名詞 *Gelegenheit* の回数副詞 ⁸⁾ *Mal/mal* による量化であり、これと数詞による *Gelegenheit* の量化を比較することである。第2節では出来事の複数性 (event plurality) を細分化し、これに関し詳しく論じた Hofherr/Tovena (2015) の研究成果を中心に取り上げることで、ドイツ語における現象の位置づけを明らかにする。これら先行研究では副詞規定による量化が主に

5) この例文は、Deutscher Wortschatz / Leipzig Corpora Collection (<https://wortschatz.uni-leipzig.de/de>) においてキーワード *Gelegenheiten* を用いて検索した例文の1つ。以下では、[Deutscher Wortschatz, Leipzig] と出典を略記する。

6) 筆者による改変。

7) *Es gibt* は非完結的動詞であるわけだが、これは *Mal/mal* によって問題なく量化され得る。同様のことは *sein* 動詞を用いた文 “Ich war schon zweimal in Frankfurt” (cf. Pittner 1999)

8) 本稿で回数副詞と呼ぶものは、Doetjes (1997) における cardinal adverb、Hofherr/Tovena (2015) における cardinality adverb に対応する呼称で、いわゆる頻度副詞 (Frequenzadverbien) よりも狭い定義である。

取り扱われている。次に数詞 + mal の副詞規定は、「数詞 + 名詞の Mal」からの派生であるので、第3節では Mal/mal の基本的性質を概観し、副詞規定用法とその他の用法との関連性を観察していく。第4節では、名詞 Gelegenheit の特徴を独辞典の記述および DWDS を参考に考える。Gelegenheit は、可算名詞としても、不可算名詞としても振る舞い、さらに zu 不定詞を伴うことため、動詞に基づく内部構造を有する出来事名詞であることが分かる。最後に以上の内容を踏まえた上で、第5節では、〈数詞 + Mal + Gelegenheit〉を含む文と〈数詞 + Gelegenheiten〉を含む文の比較を行う。最後に結論を述べる。

2. 出来事の複数性

出来事を量化する方法には言語によってもいくつかの手段があり、ドイツ語においては副詞規定による動詞句もしくは文全体の量化、そして数詞の直接付加による出来事名詞の量化の手段などがある。Hofherr/Tovena (2015) では英語を中心に、イタリア語やフランス語などにおける副詞規定による出来事の複数を表す4つの手段 1. 基数副詞 (cardinality adverb)、2. 量化副詞 (quantification adverb)、3. 頻度副詞 (frequency adverb)、4. 複行為的副詞規定 (pluractional adverbials) を紹介しているが、副詞規定による量化はそのうちの基数副詞 (本稿の「回数副詞」) に当たる (第3節)。出来事の名詞の量化に関しては第4節で Gelegenheit を具体例として扱い、論じる。

2.1 出来事の量化条件

個体を表す名詞はその指示物を数えることができる。これが可算名詞である (cf. Krifka 1989)。それに対して、出来事をあらわす名詞表現も存在する (出来事名詞)⁹⁾。(4) は、「ハンスが三回跳んだ」という出来事が3回起きたと解釈できる。ここでは、動詞句または文が表す事態が出来事として数えられている。それに対して、(5) は、「ハンスは三つの跳躍を行った」などの文中 Sprung (跳躍) という出来事名詞と数詞 drei が用いられることで跳躍という3つ (回) の行為が行われたことが表現されている。

9) Larson (1998)、Bierwisch (1990-1991) および Bücking, Sebastian (2009)などを参照。

(4) Hans sprang drei Mal/Male.

(5) (Hans machte) drei Sprünge (.)

出来事が名詞で表現されても、個体を表す名詞の場合と同様に数えることができる。(4)の場合には、回数副詞を用いることで出来事が数えられているのに対して、(5)では *drei Sprünge* で出来事が数えられている¹⁰⁾。

出来事を数えることは当たり前になされるわけであるが、ある出来事が複数あるという時、たとえば「太郎は次郎を3回訪ねた」という時と、「3つのりんご」という存在物の複数に関していう時では抽象化のレベルは異なっていると考えられる。何かを量化するということは複数ある存在物のあいだにある種の同一性、すなわち同一の範疇が認識されていなければならない。空間が隔たれて、横並びに置かれた3つの存在物はその（主に視覚的）類似性に基づき同一範疇に帰属させられることで「3つのりんご」ということができるということだ。

この種の同一性は複数の出来事の間にも、一部条件を見直すことで、適用することができると思われる。すなわち、時間を隔てずに太郎が次郎を3回訪問するというのは不可能であるため、出来事の量化には時間的な隔たりという条件が加えられる。そしてそのため、太郎が次郎を3回訪ねたこともそれぞれ時間（や場合によっては空間も）という条件が厳密な意味での同一性を妨げるわけであるが、しかしこれらも問題なく同一の出来事として扱われる¹¹⁾。

Davidson (1967) は *event* を「空間的、時間的に特定されたもの」としており、これは指示や量化が可能であるということから帰結している。Davidson (1969) の以下のような主張がそれを表している。

In short, I propose to legitimize our intuition that events are true particulars by recognizing explicit reference to them, or quantification over them, in much of our ordinary talk.

簡潔にいうと、出来事は、多くの我々の普通の会話において、出来事に対する明示的な指示またはそれらの量化を認識することを通じて、真なる特定物であるという、我々の直感を正当化することを私は提案する。(訳筆者)

(Davidson 1969:297)

10) Ehrich (1991)などを参照。

11) しかし、ある事件、停電などが日本全国で同時に複数発生した場合、この出来事は「件」を用いて、その継起性を避けて表現することができる。

出来事には完結的なものと非完結的なものの可能性があり、そしてそれら出来事存在条件に量化可能性が含まれている。かつ出来事は指示性を有した具体物であると考えられ、出来事は指示性と抽象性を共に有したうえで、量化されるということだ。

Davidson は出来事を完結的な動詞に限定していたが（いわゆる「達成動詞」や「到達動詞」）、Neo-Davidsonian のパラダイムにおいてこれが非完結的な述語まで拡張され、広義の出来事として *eventuality* が定義されている¹²⁾ (Maienborn 2011)。

2.2 出来事の複数を表す様々な形式

Hofherr/Tovena (2015) では出来事の複数を表す手段として副詞規定を主に取り上げられている。

基数副詞は、数詞や曖昧な数によって表された出来事が生じることを表し、イベント *event* とオケーション *occasion* を量化するが、フェーズ *Phase* を量化することは無いとされている¹³⁾。量化副詞および頻度副詞は文献・書籍によってはここで言う基数副詞のことを指すなど用語に揺れが存在するため注意が必要である。前者の例としては *always*、*often*、*seldom* などが挙げられ、後者の例としては、*daily*、*hourly*（一定の頻度）；*frequently*、*occasionally*、*sporadically*、*periodically*、*regularly*（変異的 / 相対的頻度）がある。両者の区別（特に変異的 / 相対的頻度）は大まかには、頻度副詞が均質な分布を含意しかつ事象が生起するインターバル（一定期間）を要求するのに対して、量化副詞にはそのような含意はなく、期間は必ずしも明示されないという違いがある。本来、複数行為性は動詞に形態的標識を付与することで出来事の複数を表す言語形式であるが (Müller/Sanchez-Mendes 2019)、複行為的副詞規定は副詞の形式で出来事の複数を規定するものである。複行為的副詞規定の例としては *one by one*（一つひとつ）や *slice by slice*（一枚一枚）のような「分布関係における粒度を限定 / 規定する」表現が挙げられて

12) このことは本稿における出来事名詞に関しても問題となってくるであろう。名詞によって表される出来事は果たして、狭義の *event* に属するのか、広義の *eventuality* に属するのかここでは問題にしない。

13) Tovena/Khim (2008) の Cusic の分類によれば *phase* < *event* < *occasion* (< *history*) と段階があり、それぞれ *phase* と *event* が語彙レベル、*event* と *occasion* は文レベルの出来事であり *event* が中間段階として重要な役割を担っている。

いる。

3. Mal の用法

これまでの回数を表す副詞に関する英語の *time/times* に関する先行研究は、ドイツ語の *Mal/mal* にもその考えを応用することができると思われる。他方でドイツ語の *Mal* にはあって、英語の *time/times* にはない特徴が存在する。以下ではまず、この特徴を *Mal/mal* の用法における問題として以下で取り上げる。引き続き、*Mal/mal* の基本的用法および特徴を押さえた上で、全体の議論への足掛かりとする。

3.1 問題の所在

すでに (3) として示した例 (6b) の意味は (6a) の「数詞+複数名詞」の意味と客観的にはほぼ等価であるといえる。(6a) では、*drei Gelegenheiten* が用いられているが(数詞+複数名詞)、その代用であるかのように (6b) *dreimal Gelegenheit* (回数副詞+単数名詞) と表現することができる。

(6) a. Für die Bürger gibt es gleich **drei Gelegenheiten**, sie bei Podiumsdiskussionen miteinander zu vergleichen.

b. Für die Bürger gibt es gleich **dreimal Gelegenheit**, sie bei Podiumsdiskussionen miteinander zu vergleichen.

(6a) と (6b) の表現は、[*drei Gelegenheiten*] と [*dreimal Gelegenheit*] のように同じ名詞句構造に見えるが、異なった統語構造を有している。(6) の例文を単純化した文を考えてみると、(7a) のように *drei Gelegenheiten* を前置するのは問題ないが、(7b) の *dreimal Gelegenheit* では容認度が下がる¹⁴⁾。また、(7c) のように *dreimal* だけを文頭に置く文は、違和感なく受け入れられる。

(7) a. **Drei Gelegenheiten** dazu gibt es für die Bürger gleich.

three opportunities for-that gives it for the citizens soon

‘There are three opportunities for the citizens to do so at once.’

14) 2人のドイツ人男性(20代、ヘッセン州、ノルトライン＝ヴェストファーレン州出身)に尋ねたインフォーマントテストによる。以降のインフォーマントテストの回答も同一人物によるものである。

b. ?**Dreimal Gelegenheit** gibt es für die Bürger dazu gleich.

three-times opportunity give it for the citizens to-do-so soon

c. **Dreimal** gibt es **Gelegenheit** für die Bürger dazu gleich.

(7c) の解釈に問題がないのは、(7c) の dreimal が副詞規定であるということを示唆する。そのスコープは動詞句または文にあるといえるが、(6b) (のような語順) もそれと同様であると考えてよいのであろうか。以下、引き続き Mal の基本的性質を概観し、当該問題の適切な位置づけを探る。

3.2 基本性質

Mal/mal には対格名詞句由来の 2 種類の副詞規定用法があり、伝統的には頻度副詞規定 (Frequenzadverbial) (本稿：「回数副詞」) と時の副詞規定 (Temporaladverbial) と呼称されてきた (cf. Pittner 1999; 筒井 2009)。副詞用法は名詞用法からの派生であると考えられ、「時点」を表していた語は現在も変わらず名詞用法として残っている。以下名詞→副詞 (→倍数) という予想される意味変化の流れに即して各用法を見ていく。

3.2.1 名詞用法

歴史的に古い意味をまだ残していると考えられるのが名詞用法である。なぜならばその中核的な意味は他の用法においても程度は異なるが、共通して見出すことができるからである。das zweite Mal 「二度目」や die zwei Male 「二回」のような指示用法がそれである。これらは時点を対象化している表現であり、かつ主語や目的語の位置にも立つことができるため、副詞ではない。前者はいくつかある同一と見なされる出来事内の二度目を指し、後者は時点二つをまとめて指す。これは時点という単位を通じて特定化された対象を指示しているといえる。以下がその例である (例文 (8) と (9))。

(8) Natürlich gab es ein nächstes Mal, und auch ein **drittes und viertes Mal**.

(強調筆者)

Widmer, Urs: Das Buch des Vaters, Zürich: Diogenes 2004, S. 181 [DWDS]

(9) Sollte eine China-kritische Resolution eingebracht werden, „wird der Ausgang nicht anders sein als **die sieben Male** davor“. (強調筆者)

Berliner Zeitung, 08.03.1999¹⁵⁾ [DWDS]

名詞用法よりも副詞として用いられることの方が圧倒的に多いのだが、この名詞用法は「時点を対象化したもの」であるため、概念としての中心を占めていると言える。gestern（昨日）や dieses Jahr（今年）などの語・句（時の副詞）も同様に対象を示していることが、以下の例において前置詞の目的語の位置に生じることが示している。従って概念の中心である指示用法が副詞用法のあり方を説明する上でも基礎にあると考える。

(10) Etwas hatte sich **seit gestern** verändert. (強調筆者)

Glavinic, Thomas: Die Arbeit der Nacht, München Wien: Carl Hanser Verlag 2006, S. 26

(11) Spätestens **nach dem dritten Mal** muss Katharina abgenommen haben.

(強調筆者)

Dölling, Beate: Hör auf zu trommeln, Herz, Weinheim: Beltz & Gelberg 2003, S. 24

[DWDS]

3.2.2 時の副詞規定

時の副詞用法は **einmal** または **mal** の形で、ある生じた出来事の位置づけを行う。Duden (2007) では **eines Tages**、**vor langer Zeit**、**irgendwann** など過去や未来の「不定の時点」の意味であるとパラフレーズされている。

筒井 (2009) は心態詞 **mal** への文法化の過程において、回数副詞 (規定) と心態詞の **ein (mal)** の中間に時の副詞 (規定) 用法を位置づけられると主張する。これは主に以下の4つの基準、即ち1. 文頭配置可能性、2. 命題の真理条件への関与、3. 作用域、4. 強勢に基づいている。時の副詞がどのような意味で中間的であるのかというと、まず1. と2. の条件が心態詞と副詞を隔てている。そして3. において作用域の段階的変化がみられること。4. の強勢の有無も同様に段階的な、厳密には強勢の位置も異なって、違いが存在しているということである。以下の表は筒井 (2009) より引用である。

15) この例文は、DWDS – Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache を用いて検索した例文である。以下出典は以下、[DWDS] と略記する。

表 1

	文頭配置可能性 (統語論的要素)	命題の真理条件へ の関与 (意味論的・語用論的 要素)	作用域 (統語論・意味 論的要素)	強勢 (音韻的要素)
心態詞 mal	無	無	TP	無
時間副詞 (ein)mal	有	有 (事象が複数回でも真)	Asp'	無／有
頻度副詞 einmal	有	有 (事象が複数回では偽)	VP	有

筒井 (2009:130)

ここで重要なのは時間副詞の einmal と頻度副詞 (回数副詞) の einmal が綴り上の同一性に反して、作用域と強勢 (そして (ein) mal と形の上でも省略することが可能なこと) の点で区別が可能だと主張されていることである。また「時間副詞 einmal が設定する『不特定の時間幅』」(筒井 2009:131) と「『一回／一度』を意味する頻度副詞」(筒井 2009:125) という基本的な意味の区別がそれに基づき判断できることである。

3.2.3 回数副詞規定

ある行為を x 回行うことを表現したい時、現代ドイツ語では多くの場合「数詞 + mal」の形式 (以下では x -mal と略記¹⁶⁾) が使われる。3 回なら drei + mal で、dreimal となり、回数副詞として用いられるが、これは上述したように、名詞 Mal を伴った用法から作られたと考えられる。そして、(12) に示すように、drei Mal のように分かち書きすることができるが、現代ドイツ語では drei Male のように Mal が複数的一致をすることはないとされている¹⁷⁾。

16) x -mal は、実際の語としても存在し、「1. x 回、2. (話) 何度も」の意味なので、本稿では任意の回数を表す変数をイタリック体で示すことで区別する (x -mal vs. x -mal)。

17) Krifka (2013: 12) は、drei Mal の Mal は、類別詞 Stück と同じように複数形がないとしているが、後述するように特定の修飾語を伴うと複数形になる。

- (12) Maria rief Thomas dreimal/drei Mal/*drei Male an.

Maria called Thomas three-times VPRT (an) ¹⁸⁾

‘Mary called Thomas three times.’

頻度副詞の下位区分としての回数副詞は、**drei Mal** のように副詞規定として句を作り、(13) のように分離することはない。

- (13) a. *Mal rief Maria Thomas drei an.

time called Maria Thomas three VPRT (an)

- b. *Drei rief Maria Thomas Mal an.

three called Maria Thomas time VPRT (an)

通常は副詞規定の中で複数形とならない **Mal** であるが、修飾語を伴うと複数形になることがある。(14a) のように数詞と名詞 **Mal** の間に **weiter** が入り、**zwei weitere Male** となっているもの、(14b) のように本来の数の意味が薄れた **tausend** と共に使われている **tausende Male** 「千回も⇒何回も」のような例、さらに (14c) の **beide Male** 「2回」、(14d) **mehrere Male** 「数回」、(14e) **einige Male** 「数回」のような不定数の頻度を表す固定表現では、**Male** が多く用いられる。

- (14) a. Hradecky musste noch **zwei weitere Male** hinter sich greifen.

‘Hradecky had to get it over two more times.’

(www.berchtesgadener-anzeiger.de, gesammelt am 27.03.2018)

- b. Der Clip dazu wurde auf Youtube **Tausende Male** angeklickt und ist inzwischen Kult.

‘The clip was clicked thousand times on YouTube and praised in the meantime.’

(bazonline.ch, gesammelt am 27.03.2018)

- c. **Beide Male** wurden Geldstrafen verhängt.

‘People were fined in both cases.’

(www.np-coburg.de, gesammelt am 26.03.2018)

- d. Ich musste mich **mehrere Male** kneifen, um das wirklich zu glauben.

‘I had to pinch myself in order to think that it is really true.’

18) 当論文では、必要に応じてグロスに次の略語を用いる。VPRT: verb particle (動詞不変化詞)

(www.volksstimme.de, gesammelt am 30.03.2018)

e. Jetzt ist es mir schon **einige Male** passiert, dass mir meine Telefonleitung abgeschnitten wurde.

‘It happened to me several times that the telephone line was cut off.’

(www.pattayablatt.com, gesammelt am 28.03.2018)

(強調筆者) [Deutscher Wortschatz, Leipzig]

Krifka (1989) でも Mal を、数え上げ副詞規定 (Zähladverbial) と呼び分析しているが、Mal を中心に扱った先行研究には筒井 (2009) がある。筒井 (2009) は心態詞の mal の分析の導入として、時の副詞 (規定) の (ein) mal (以前に) と並んで回数副詞規定 **einmal** が扱われている。ただし、筒井 (2009) は、回数副詞 **einmal** に関して2つの重要な指摘をしている。まず回数副詞の **einmal** は、常に語頭シラブルに強勢アクセントが置かれるということ、mal は「event time を量化する演算子」(筒井 2009) である、とする。event time (イベント時) は一言で表すと副詞によって表される (量化されうる (例: zweimal など)) 時間幅のことを表している。

下記 (15) の例文において、頻度副詞の下位にある回数副詞 **dreimal** は、何をスコープとするかを考えてみよう。(15) の「犬が3回ジャンプした」ケースでは、ジャンプの回数が数えられていると考えられる。Davidson (1967) 以来の概念として概略、「特定の時間・空間に位置して起こる1つの特定のモノ」と出来事を捉える (出来事意味論の議論は第2節を参照)。そうすると、「ジャンプした瞬間」がイベント時であり、それが3回あった、という意味になると考えられる。

(15) Der Hund ist dreimal/drei Mal gesprungen.

the dog is-AUX three-times jumped-PP

‘The dog has jumped three times.’

文全体を出来事と捉えることもできる。「その犬がジャンプした」という出来事が3回あった可能性もある。(16) は異なる階層の出来事が二重に絡んでいることが分かる¹⁹⁾。すなわち、「マリアがトーマスに2回キスをした」という出来事が3回起こった、ということで、文頭の **Drei Mal** は、文全体をスコープとし、文末

19) Landman (2006:234) の (11a) Three times Dafna kissed Susan twice. の類例をドイツ語で作例したものである。

の *zweimal* は、動詞句をスコープとしている。このように、基本的には、文全体をスコープとする文副詞規定としての *x-mal/x Mal* と、動詞句をスコープとする *x-mal/x Mal* が存在すると考えられる。

(16) *Drei Mal küsste Maria Thomas zweimal.*

three times kissed Maria Thomas twice

‘Three times Maria kissed Thomas twice.’

ドイツ語の名詞 *Mal* を使った表現は、英語における *times* を使った表現、オランダ語における *keer* を使った表現に対応する²⁰⁾。オランダ語の場合は、ドイツ語の場合と同様に単数形と複数形が許容され、英語とは対照的である。

(17) a. *John jumped three *time/times.*

b. *Hans sprang drei Mal/Male.*

Hans jumped three time/times.

c. *Dafna sprong drie keer/keren.*

Landman (2006: 9)

Defina jumped three time/times.

3.2.4 倍数

「*x-mal* + 数詞」の形式で、「～倍」を表す形容詞的機能を果たす *Mal/mal* を倍数用法と呼ぶ²¹⁾。(18a)は、「500の2倍」の意味で、*zweimal* は、後続の数詞を基にしてそれを2倍にするという意味である。(18b)は、*zweimal fünfhundert* が補部となり、名詞 *Gramm* を主要部とする数量詞句で、「500の2倍」グラム、即ち、1000グラムを意味する²²⁾。(18c)は、*zweimal fünfhundert Gramm* が全体で類別詞のように働き名詞 *Wolle* を主要部とする名詞句である。Krifka (1991:402) にならい、類別詞的に機能する数量詞 NM (Numerativ) とその補部に付く数詞 NL (Numerale) が、数量詞句 NMP (Numerativphrase) を作る考えると (18c) は、

20) ヨーロッパ言語の副詞的量化詞 *adverbial quantifier* に関する調査で、時の語の類型論としてオランダ語の *keer* に加えドイツ語の *Mal/mal* と同源語の *maal* も取り挙げられている。前者は動詞由来の副詞的量化詞 *adverbial quantification* であるのに対し、後者は時を表す (Morena Cabrela (1998:169))。

21) 辞書によってはこの *mal* が「前置詞」であるとか (Langenscheidt)、「接続詞」であるとか (Duden)、記述に揺れがあり、問題を孕んでいる用法であることが分かる。

22) 査読者によって「*fünfhundert Gramm* が *zweimal* ある」、すなわち *zweimal [fünfhundert Gramm]* という構造も提案されてしかるべきとの指摘をいただいたが、これがまさに倍数を表す用法と数えや計測の機能を有する数量詞構文との違いであると考えられる。

(19) のような統語構造になる。

(18) a. zweimal fünfhundert

two-times five-hundred

b. zweimal fünfhundert Gramm

two-times five-hundred gram

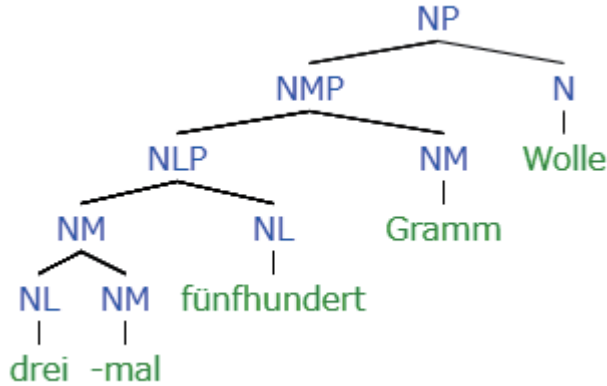
c. zweimal fünfhundert Gramm Wolle

Krifka (1991:411)

two-times five-hundred gram wool

(19) a. [NP [NMP [NM [NM [NL drei] [NM -mal]] [NL fünfhundert]] [NM Gramm]]
[N Wolle]]

b. 樹形図



この倍数の用法は、英語にも共通して、掛け算を行う際に用いられる表現でもある。倍数を表すのが時間表現であるというのは単純に日本語（「かける」）と比較しても興味深い現象である²³⁾。

4. Gelegenheit の語彙的特徴

冒頭で示した例文 (3b) が、Mal/mal による量化の対象として Gelegenheit が選択されうることを表している場合、これには Gelegenheit という語の語彙的特徴が関わっていると考えられる。これを考察するためにまず辞書記述を参照し、考

23) ドイツ語にはさらに加えて x-fach で倍数を表す方法もあるが、これは量の倍数を表すのであって、個数の倍を表すことは無いと思われる。こちらは das Fach 「(引き出しなどの) 仕切り」を意味する語である。

察を進めていく。次に DWDS に基づく用例から *Gelegenheit* の量化語の分類および Num + Mal/-mal の用例の観察を行う。

4.1 辞書記述

名詞 *Gelegenheit* の指示対象は何だろうか²⁴⁾。Dornseiff (1970) は概念領域にわけて語彙を表示している辞書である²⁵⁾。そこで *Gelegenheit* は 20.27 の Billig (安い)、5.12 の Bewandtnis (状況)、6.34 の Rechter Zeitpunkt, *Gelegenheit* (正しい時点、機会) の Sachgruppe に分類されている。「安い」は、明らかに *Gelegenheit* の 1 つ読みとして *Gelegenheitskauf* (掘り出し物) があるからであり、これは特殊化された用法である。そうすると、(1)「状況」、(2)「正しい時点」および「機会」が意味分類として考えられる。

さらに、Langenscheidt (2015) と Duden (2007) における記述を見てみよう (下記 (20) および (21))。特殊な読みとしての *Gelegenheitskauf* (掘り出し物) や婉曲表現としての読み Toilette (トイレ) そして Anlass (催し物) を除くと意味分類は、以下の 3 つになる。ここでの共通項は、「時点」(Zeitpunkt, Augenblick)、「状況」(Situation, Umstände)、「可能性」(Möglichkeit) の 3 つがあることが分かる。

(20) Langenscheidt (2015) の意味記述

1. ein Zeitpunkt od. eine Situation, die für einen bestimmten Zweck günstig sind.
2. die Möglichkeit, etwas zu tun

(21) Duden (2007) の意味記述

geeignete Umstände, um etw. Geplantes auszuführen; [günstiger] Augenblick;
Möglichkeit

上記の辞書で挙げられている例を吟味してみよう。形式的に見ると、*Gelegenheit* は、無冠詞単数、無冠詞複数、不定冠詞付き、定冠詞付き単数、定冠詞付き複数に分けられる。これらは、表で次のようにまとめられる。

24) Pfeifer (1993) の記述に依れば *Gelegenheit* の語源は、中高ドイツ語においては物の在り方や物の位置、状態、隣接する国を意味し、初期新高ドイツ語においては時間、それから誰かまたは何かが位置する関係であった。

25) 併記された数字は Dornseiff (1970) による小区分カテゴリーの番号である。

(22) Gelegenheit の単数・複数と定・不定の関係

表 2

	無冠詞	不定冠詞付き	定冠詞付き
単数形	Gelegenheit	eine Gelegenheit	die Gelegenheit
複数形	Gelegenheiten	x	die Gelegenheiten

抽象名詞であるとして不可算名詞という観点でみると、無冠詞単数形の形が候補となる²⁶⁾。上記の2つの辞書からの例では、次のようなものがある。

(23) a. jemandem (die) Gelegenheit zu etwas geben Langenscheidt (2015)

b. dazu bietet sich bald [eine] G. Duden (2007)

c. jmdm. [die] G. geben, etw. zu tun Duden (2007)

上記(23)の例では、定冠詞、あるいは不定冠詞の部分が[]に入れてあり、省略可能な例として挙げられている。Gelegenheit と結び付いている動詞としては、geben, sich bieten があるが、コーパスからみた動詞との結びつきでは、存在動詞 (es gibt, sein, sich bieten) や状態動詞 (haben) などでも無冠詞単数形があり、さらに zu 不定詞句が付く例でも無冠詞単数形が現れる。

4.2 DWDS に基づく Gelegenheit の修飾語の分類

4.2.1 量化詞

量化詞に関してはまず、不定の数を表す viel や wenig などの量化詞、定まった数を表す基数詞による量化詞、この2種類が区別される必要がある。Gelegenheit は抽象名詞であるため、これに加え不可算の特徴が考慮される必要がある。tausend の特殊な用法などを除いた基数詞は厳密な定まった個体の数を示すが、viel のような不定の数を表す量化詞は以下のように、量化詞と名詞が複数で一致を表し、可算・不可算が反映される。

(24) viele Gelegenheiten: 量化詞 (many) + 可算名詞複数

viel Gelegenheit : 量化詞 (much) + 不可算名詞単数

Gelegenheit における可算・不可算がどのように分布しているのかを、冠詞または

26) ここでは表層的な形から分類した表を示している。もちろん、ドイツ語では不定冠詞付き複数形は存在せず、無冠詞複数形が [-Def, -Sg] (不定で複数) となる。

数詞および量化詞の有無により分類すると、可能性としては以下のものがある。

表 4

	可算 (Z: zählbar)	不可算 (U: unzählbar)
単数形 (S: Singular)	eine Gelegenheit (=ein Buch)	(viel) Gelegenheit (=Holz (Stoffnomina), Geld (Kollektiva))
複数形 (P: Plural)	(zwei/ viele) Gelegenheiten (= (die) Bücher)	∅ (=Leute, Alpen)

それではまず、結果が比較的明解に説明され得るであろうと目される、不定冠詞および基数詞、すなわち可算の場合から整理していく。当然であるが2以上の基数詞など、定の量化詞が付加された場合、Gelegenheitは複数形になる。しかし、下記の例(25)の数詞tausendの例は、実際に千という数を数えてはおらず、量の多さを表すのにもかかわらず、語自体が基数であるため名詞との数の一致が示されている。これにはその他の基数詞と同じ文法規則が強く機能しているためと考えられる。

(25) Und ich wünschte mir **tausend Gelegenheiten**, um ihr zu beweisen, wie lieb ich sie habe. (強調筆者)

Sapper, Agnes: Werden und Wachsen, Hannover: Gundert 1967 [1910], S. 131 [DWDS]
一方、修飾語にvielのような数が明確ではない不定量化詞が付加される場合、Gelegenheitが表すのが、可算なのか不可算なのかに応じて形態が変化することが用例からは確認できる。(26a)は複数名詞の数と一致しており、(26b)のvielは名詞の性・数との一致を示していない²⁷⁾。前者が可算で後者が不可算である。

27) 用例の少なかった複数名詞と量化詞vielの一致を示さない例を(i)として挙げる。
(i)のような例は少数であるため議論からは取り除いた。

(i) Für den Großinserenten, der jede Gelegenheit benutzt, um sich in Erinnerung zu rufen, kann es eigentlich gar nicht zu viel Gelegenheiten zu Anzeigen geben, und nur diejenigen Organe sind wertlos, deren Verbreitung oder Beachtung in einem offensichtlichen Gegensatz zu den darüber gemachten Angaben steht.

Behrmann, Hermann: Das Inserat, Wien: Barth 1928, S. 75 [DWDS]

DWDS-Kernkorpus (1900–1999)のそれぞれのタイプの数の簡単な内訳は以下であった：
a.18例、b.35例、c.2例。c.は用例が古いことから、「複数名詞と量化詞vielが一致しない」例はその後いずれかの用法に収斂していると考えられる。

- (26) a. Für die vielen kleinen Geschenke ergeben sich schier unendlich **vielen Gelegenheiten**.

Dänhardt, Reimar: Fein oder nicht fein, Berlin:
Deutscher Militärverl. 1972 [1968], S. 186

- b. Als wir ihn nach Brunnwinkl mitnahmen, war dort an schönen Sommertagen so **viel Gelegenheit**, den Zimmern zu entfliehen, daß er sich bald ganz daran gewöhnte, den Tag im Walde zu verbringen und jeden Abend - schon der Mehlwürmer wegen - ins Haus zurückzukommen.

Frisch, Karl von: Erinnerungen eines Biologen, Berlin: Springer 1957, S. 17
(強調筆者) [DWDS]

(25) の示す例と (26) の表す例は、不定の (多) 数を表しているため互いにほぼ同義であるといえる。一致を示さない (26b) のような不定の数量詞のみが不可算名詞を量化することができる²⁸⁾。

最後に (単数・無冠詞・) 不可算の *Gelegenheit* と (単数・不定冠詞) *eine Gelegenheit* に関してだが、両者の間に本来予想される、指示性を有するか否かという意味の差 (個体名詞が不定冠詞付きならば個体を指し、無冠詞であれば抽象的な特徴 (機能など) を指し示す) はここではそれほど顕在化していない。なぜならば冠詞の有無に関わらず、ほとんどの場合 *Gelegenheit* は *zu* 不定詞で内容を伴わせるため、いずれの場合も特定性 (または指示性) が高いのである。以下の (27) のような *zu* 不定詞句を伴わないでかつ無冠詞用法の例はむしろ例外的である。

28) 不定の量化詞 *viel* の使用頻度の高かった二つの形式 (a. 量化詞 *viel* が単数 (抽象) 名詞に一致しない例および b. 複数名詞に一致するもの) はどちらも問題なく容認されたわけだが、この意味の違いについてインフォーマントに尋ねた。

- (ii) a. Hans hatte viel Gelegenheit.
b. Hans hatte viele Gelegenheiten.
c. *Hans hatte viele Gelegenheit.
d. *Hans hatte viel Gelegenheiten.

インフォーマントによれば、a. は抽象的な出来事、b. は具体的な出来事を表しているとのことで、これは可算と不可算における抽象名詞一般の振る舞いと同様であることが分かる。また、用例の少なかった c. および作例による d. は共に母語話者にとっては容認しがたい用法であった。

(27) Dabei hätte ich **Gelegenheit** genug gehabt. (強調筆者)

Die Zeit, 28.06.2012, Nr. 26 [DWDS]

よって、Gelegenheit (haben) においては「無冠詞」対「不定冠詞」の対立はない。辞書記述における括弧 [] の表記もこれを支持しているようである。しかしこの「無冠詞」対「不定冠詞」の対立は通説に基づけばやはり予想されそうなものでもある。その結論はコーパスのデータを統計的に処理することでより説得力のあるものが引き出せそうだが、しかしこれはまた別の機会に譲りたい。

以上量化詞 + Gelegenheit の諸相について見てきたが、つぎに量化詞と類似する機能を有する現象、Mal/mal が前置する場合について引き続き見ていく。

4.2.2 Num + Mal/-mal

Mal/mal が名詞 Gelegenheit の量化詞として機能しているような場合でも、句としてのまとまりが弱いということについて冒頭で少し触れた。この語順には何かしらの制約があることが予想されるわけであるが、考察作業は第 5 節で行うとして、ここではどのような用例があるのかを観察していく。次のコーパスより収集した実際の例 (28) および (29) は Mal/mal と Gelegenheit の結びつきが存在することを示唆するように思える²⁹⁾。

(28) In der neuen Spielzeit haben Sie noch **dreimal Gelegenheit**, dieses außergewöhnliche Werk zu erleben.

Berliner Zeitung, 27.06.2003

(29) „Der Kunde muss dem Händler **zweimal Gelegenheit** zur kostenlosen Nachbesserung geben“, erläutert Stroech.

Die Zeit, 03.05.2006, Nr. 18

(強調筆者) [DWDS]

しかし冒頭で触れたように、Mal/mal を文頭に移動させる語順操作により容認

29) この二つの例文に基づいてインフォーマントにテストを行った。下記の両例は予想通り文法的であると判断された。さらにインフォーマントによる興味深い指摘があった。mal を伴った場合の方が「数を数えている」、「フォーマルであり、かつ丁寧である」とのことであった。

(iii) a. Ich hatte dazu zweimal Gelegenheit b. Ich hatte dazu zwei Gelegenheiten.
b. Ich hatte dazu zwei Gelegenheiten.

度の判断が落ちることも関連してか、Mal/mal が Gelegenheit と共起し主語となっている例は調査した限りではほとんど存在しなかった。しかし (DWDS 内で) 唯一発見された例がある (例 (29))。以下の例はしかしながら、やはり Mal/mal と Gelegenheit が句を形成して主語となっているのかどうか厳密には確かでない³⁰⁾。

(30) *Dazu ist in den kommenden Tagen gleich zweimal Gelegenheit.* (強調筆者)

for-it is in the coming days soon two-times chance

‘For that there are two chances in coming days’

Berliner Zeitung, 05.06.1997 [DWDS]

最後に参考の為、Gelegenheit 以外の出来事名詞の例で、(31) と (32) を挙げておこうと思う。Mal/mal はこの例においては名詞に前置され類別詞のように振舞うことで、前置詞句内に名詞句を形成している。しかしこれは如何なる名詞にも制約なく用いられるわけではないようであり、名詞の種類(意味)に依存している。Mal/mal + Gelegenheit に関してこのような前置詞句内に生起する例を見つけることができなかった (もしくは許容されない)。そのため汎用性は高くないと言えるかもしれない。許容される名詞の種類とは出来事名詞なのではないかと考えられ、以下参考に共起する他の出来事名詞の例を挙げる。量的調査に関しても別の

30) この例文の語順は談話構造に基づき、前置詞代名詞 (Präpositionales Pronomen) dazu が文頭に来る主題化されている。これを基本語順に則り並べ替えたものが例 b. であり、c. がネイティブスピーカーにより提案された書き換えである。

- (iv) a. *Dazu ist in den kommenden Tagen gleich zweimal Gelegenheit.* (= (30))
 b. ? *Zweimal Gelegenheit dazu ist in den kommenden Tagen gleich.*
 c. *Gelegenheit dazu ist in den kommenden Tagen gleich zweimal.*

c. では *zweimal* がその他副詞要素と同様に中域内に配置されてある。c. が容認可能であるのと対照的に、b. の例の容認度が落ちることにより示唆されるのは主語の位置を占めることができるほど句としてのまとまりをなしていないということである (しかし容認不可ではない)。しかし b. のように Mal/mal + 名詞で始まる文は稀であることが DWDS の検索からは明らかに見て取れ、あった場合でも未完の文、テキストの見出しなどにおいて用いられている場合が多くを占めている。これに加えて重要な観察結果として、Mal/mal によって名詞の量化が行われる構文は新聞記事に多く見られるということがある。この観察はレジスターがこの構文使用の動機づけとなっており、インフォーマントの「フォーマルな言い回し」という直感と一致する可能性がある。新聞記事に多く用いられるのは、かなりの程度で確かだと思われるが、これは調査する新聞記事の種類を増やし、その他のジャンルのテキストと比較して初めて分かることであるため、断言は避けたい。さらに文の種類 (動詞無し文など) にも注目していく必要がある。

機会に譲ることとする。

- (31) Nach dreimal Bewährung kann das Gericht kein Auge mehr zudrücken.

Berliner Zeitung, 26.02.2005

- (32) Erst Bismarck machte sie dazu. 1871 bis 1945, nur 74 Jahre, waren Zeit genug für zweimal Weltkrieg, dreizehn Jahre Faschismus, millionenfachen Mord an Jüdinnen, Kommunistinnen, Sinti, Roma und Zwangsarbeiterinnen.

Die Zeit, 31.08.1990, Nr. 36

(下線・強調筆者) [DWDS]

5. 考察

以上の言語現象の在り方を踏まえると Mal/mal + Gelegenheit という句の単位を認めることに一定の証拠はあったように思える。以下の考察ではこの言語単位を前提としたうえでさらにその意味および機能についての動機づけに関して考察していくこととする。

5.1 <数詞 + Mal + Gelegenheit> と <数詞 + Gelegenheiten> の比較

これまでの議論も踏まえ、<数詞 + Mal + Gelegenheit> の構文を考えると、Krifka (1990) で主題として取り挙げられている „Four thousand ships pass through the lock“ の例から手掛かりが得られる。Krifka はこの例文には対象の計測機能に基づく「事物に関連した読み」(object-related reading) とデキゴトの計測機能に基づく「出来事に関連した読み」(event-related reading) の二つの読みがあると主張している。前者は 4000 隻の「異なる」船 (対象) が水門を通過していったという読み (「事物に関連した読み」)、後者は通過 (出来事) に焦点が当てられかつ船の数は 4000 隻以下でもあり得るという読み (「出来事に関連した読み」) だ³¹⁾。この普通名詞を伴う数詞構文においては「事物に関連した読み」から「出来事に関連した読み」が引き起こされると説明する。さらに Krifka は普通名詞 (ship, book, radioactive waste, clothing, person など) に対し、局面名詞 (phase noun) という種類

31) Krifka (1990) では極端な場合 1 隻の船でも構わないと主張しているが (cf. *ibid.*:487)、この仮定はさすがに行き過ぎである。少なくとも複数ある船の区別がつかないという含みが読み取られるため、すべてが同一の指示対象であれば数詞構文は用いられないと考える。

の名詞 (passenger, batter, freight, president, student など) を伴う構文との区別を設けた³²⁾。局面 (phase) はその名詞の時間的な切片のことを意味している。Krifka によれば局面名詞では出来事の読みが基本になる ((33) は Krifka (1990) に基づく作例)。また二つの読みには常に派生の読みが存在し、その派生方向は普通名詞と局面名詞とで反対になっている(以下の表 5 を参照(Krifka (1990) に基づき作成))。

- (33) a. Tausend Schiffe liefen mit Material in den Hafen ein.
b. Zweihundert Passagiere sind in die A330 eingestiegen.

表 5

	事物に関連した読み	(派生の向き)	出来事に関連した読み
普通名詞	Tausend Schiffe	→	Einlaufen in den Hafen von Tausend Schiffen
局面名詞	Etwa 100 Passagiere	←	Einstieg in die A330 von Etwa 100 Passagieren

passenger などの動作者を表す名詞は存在物の時間的部分 (存在物自体だけではなく) をも表していると想定されている。

これを Gelegenheit の例にも適用すると、(Gelegenheit は実際に局面名詞であると想定できるので) 数詞構文 “Ich hatte zwei Gelegenheiten“ にはすでに出来事を捉えた読みが基本として内在していると考えることができる。すでに述べたように局面名詞に関しては「出来事に関連した読み」が派生元になる。「出来事に関連した読み」はここで、「過去に 2 度経験した」になると考えられる。すなわち出来事 (Gelegenheit) が時間的継起として生じたということだ。これに対して「事物に関連した読み」は「二つの経験を持っている」といったところであろう。しかし Krifka の指摘するところでは局面名詞の場合、両方の読みの真理条件が異なるため、判別がつかなくなるという³³⁾。

本稿の主題である副詞規定の Mal/mal は様々な階層の出来事を作用域にとる。作用域は最も典型的に文全体ということもあれば、動詞句のみということもある。これが名詞 (出来事名詞；Krifka の局面名詞) にまで作用域が (統語的に) 縮小したのではないかということが考えられる。そしてその場合でもこれは出来事に

32) 局面名詞は本稿で指していた出来事名詞よりも動作者名詞を考慮しているため広い範疇である。

33) Krifka (1990:517) を参照。

関連している。しかしこの Mal/mal に伴う出来事の量化の意味は、上記の数詞構文の「読み」の議論とは異なっている。副詞規定を用いることは、数詞構文と構文として異なっているためである。Krifka (1989) は以下の様に述べている。

Konstruktionen wie *ein Schluck trinken, drei Mal schlafen* können als Gegenstücke zu Klassifikatorkonstruktionen wie *ein Kopf Salat, drei Stück Vieh* aufgefaßt werden
ein Schluck trinken、drei Mal schlafen などの構文は、ein Kopf Salat、drei Stück Vieh などの類別詞構文と対をなすものと理解することができる (訳筆者)

(Krifka 1989:180)

ここで Krifka は数量詞構文 (Numerativkonstruktion) (数詞 N + 数量詞 Num + Bezugsnomen: 例 ein Kopf Salat) の下位分類として類別詞構文 (Klassifikatorkonstruktion) を設けており、これは数量詞 (Numerativ) が集合名詞である Bezugsnomen を量化する種類のものであるとしている (その他の数量詞構文の分類は Löbel (1986) ; Krifka (1989) を参照のこと³⁴⁾)。drei Mal などは、同じく数詞+数量詞の形式で、動詞の領域における対となる性質を有していると理解されている。類別詞構文に対応して、Mal/mal は動詞であれば動詞の表す出来事を、名詞であれば類別詞構文として名詞によって表される出来事のまとまり (・形態など) を捉えていると言語表現であると理解できる。

第3節と第4節を通じてみてきた Mal/mal と Gelegenheit の性質に再び目をやってみる。Mal/mal はこれまでの議論でも見てきたように、一貫して「時間」という語彙的性質を有している。そして Mal/mal が数量詞構文、特に類別詞構文における数量詞の役割をしていると想定できるとすれば、Mal/mal が時間の単位を表す数量詞であると考えることができる。そしてこれは Gelegenheit に関して行った意味の記述から導き出せる、時間的性質と一致するものであると考えられよう。よって <数詞 + Mal + Gelegenheit> は数量詞構文の形式で表された、Gelegenheit を Mal/mal の表す時間単位で量化した言語形式であると考えられる。

34) しかしこの数量詞の分類にはそもそも問題がありそうなものや (動詞由来の Schluck と Mal を同列に扱うことなど)、分類と実際の例文との間に整合性が見いだせないものもあるため、見直しが必要であると思われる (ein Kopf Salat と drei Stück Vieh が同じ類別詞構文にカテゴリーされるとは思えない)。

5.2 非イベント名詞の量化

以上の議論からドイツ語の Mal/mal を用い、ある Gelegenheit などの時間を内在する対象（名詞）を数えることが可能であり、出来事名詞がその量化の対象であると主張してきた。しかし、数えられる対象には他にどのような種類の存在物がありうるのかはまだ明らかではない（すなわち出来事名詞に限定されない）。なぜならば、典型的には注文の場面において以下のような用例が容認され得るからである。

(34) *Zweimal zehn Pfennig Briefmarke, bitte.*³⁵⁾ (池上 2000:144)

Briefmarke がここで Mal/mal の作用域にあること自体は、仮に動詞が省略された動詞無し文 (Verbloser Satz) であるとしても問題なく受け入れられる。しかし、これが出来事名詞の量化と同様の統語構造として扱うことができるならば Briefmarke の普通名詞という性質と Mal/mal の意味的性質がここでは Gelegenheit のような出来事名詞の場合と異なり一致していない。さらに次の例は新聞の記事によく見られる mal と名詞 Gold, (Silber), Bronze の組み合わせであり、(金・銀・銅) メダルの獲得枚数を表している。これを出来事に数えるのにはやはり通常では困難が伴う。Gold 自体には「金」という意味しかないというのが通常理解であろう。

(37) Mit zweimal Gold und einmal Bronze im Teamsprint belegte der BDR den dritten Platz in der Nationenwertung hinter Großbritannien (4/1/1) und den Niederlanden (2/3/3) .

(下線・強調筆者)

Berliner Zeitung, 29.03.2005 [DWDS]

上記の二つの例に対して例えば、Mal/mal との意味的関連性がある Gelegenheit の例から、Mal/mal による量化がさらに普通名詞へ拡張されたのではないかと想定することができるかもしれない。これはちょうど Krifka (1990) で議論された「事物に関連した読み」から「出来事に関連した読み」への移行という考え方は依然として参考になる。Briefmarke は販売人がいて購入の際に料金と引き換えるという出来事が背景に想定することは可能であろうし（この文の発話時ならばそれはなおさら当然であり）、Gold に金メダルの意味があり得るのは、何かしらのスポー

35) この言語現象は池上 (2000) において「モノのコト化」という説明がなされている。

ツ大会が背景に存在し、それを獲得するという行為（出来事）が関与しているからであると思われる。しかしこの領域間の移行は一体どのような条件で可能なのかを検証する必要がある。また、この問題は先に挙げた量化対象に関する問いとして捉えることもできる。

6. 結論

<数詞 + Mal + Gelegenheit> と <数詞 + Gelegenheiten> は、前者が Mal/mal によって出来事を表す名詞 *Gelegenheit* が量化されており、後者の数詞構文は「事物に関連した読み」である限り、異なる言語表現であると主張できるだろう（しかし真理条件は異なる）。しかし、数詞構文の基本的読みが「出来事に関連した読み」である場合、<数詞 + Mal + Gelegenheit> 構文との差異はより細部に見出されるものと思われる。この微細な違いを次のように考えてみてはどうであろう。数詞構文というのは本来、数詞が名詞に前置される構造を有する。典型的な量化対象は存在物であり、すなわち存在物の量化に特化した形式である。Krifka (1990) における読みの派生関係もこれを前提にしていると思われる。他方で <数詞 + Mal/mal> は副詞規定が本来の機能である。しかしながら同時に数量詞句でもある <数詞 + Mal/mal> の機能は、後続名詞 (*Bezugsnamen*) を量化することでもある。よってこの数量詞句（副詞規定）の最も典型的な量化対象である動詞句から名詞に領域を移行することは流動的に進行しうると考える。このことによって、数量詞 Mal/mal の時間という形態の指定そして量化対象の意味の性質が、例えば出来事名詞として、一致するとき、<数詞 + Mal + Gelegenheit> は積極的に後続名詞の時間としての形態を指定する言語形式であり、単に数詞構文における読みのひとつとして生じたものとは意味が異なると主張できる。

本稿で扱った言語現象 Mal/mal + N の形式は使用が固定していない言語表現であると目される。その証拠に、母語話者の間で容認性判断に揺れがあること、さらに特定の用法・語順では容認されないという制限がその理由として挙げられる。従って質的調査で断言できることは多くはない。しかしこの用法が出現したこの原因や動機を探るということには一定の価値があるものと思われる。様々な要因が複雑に絡み合った言語現象であるからである（出来事の意味論、具体名詞と抽象名詞、可算と不可算、数量詞構文など）。そして Mal/mal による出来事

を表す名詞 (Gelegenheit など) の量化の、原因や動機は追跡不能でないことが、これまでの「出来事」を基軸にする議論で提案できたと思いたい。

コーパス

Deutscher Wortschatz / Leipzig Corpora Collection

DWDS — Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache

Etymologisches Wörterbuch des Deutschen (1993) digitalisierte und von Pfeifer, Wolfgang et al. überarbeitete Version im Digitalen Wörterbuch der deutschen Sprache, <<https://www.dwds.de/d/wb-etymwb>>, abgerufen am 28.04.2021

参考文献

Bierwisch, Manfred (1990-1991) : Event Nominalizations: Proposals and Problems. In: *Acta Linguistica Hungaria*. 40 (1-2) , S. 19-84.

Bücking, Sebastian (2009) : Modifying Event Nominals: Syntactic Surface Meets Semantic Transparency. In: Arndt Riester/Torgrim Solstad (Hrsg.) *Proceedings of Sinn und Bedeutung*. 13, S.93-107

Davidson, Donald (1967) : The logical form of action sentences. In: Nicholas Resher (ed.) . *The Logic of Decision and Action*. Pittsburgh, PA: University of Pittsburgh Press, 81-95.

Davidson, Donald (1969) : The Individuation of Events. In Nicholas Rescher, (Ed.) *Essays of Carl G. Hempel*. Dordrecht: D. Reidel, 295-309.

Doetjes, Jenny Sandra (1997) : Quantifiers and Selection: On the Distribution of Quantifying Expressions in French, Dutch and English. Ph.D. Dissertation. University of Leiden.

Dornseiff, Franz (1970) : *Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen*. 7. Auflage. 2. unveränd. Nachdruck der 5. Aufl. 1959. Berlin: de Gruyter.

Duden (2007) : *Universalwörterbuch Duden-Deutsches*. 6., überarbeitete und erweiterte Auflage, Mannheim: Dudenredaktion.

Ehrich, Veronika (1991) : Nominalisierung. In: Armin von Stechow/Dieter Wunderlich (Hrsg.) *Semantik: Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung*.

- Berlin: de Gruyter, S.441-458.
- Langenscheidt (2015) : *Langenscheidt Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache*.
Götz, Dieter (Hrsg.) München: Langenscheidt.
- Hofherr, Patricia Cabredo/ Tovená, Lucia M. (2015) : Adverbial event pluralities.
presentation material. European Summer School in Logic, Language and Information
(ESSLLI) 2015 Barcelona.
- 池上嘉彦 (2000) 『日本語論への招待』 大修館書店。
- Kluge, Friedrich (1975) : *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. 21.
unveränderte Auflage. Berlin: Walter de Gruyter.
- Krifka, Manfred (1989) : *Nominalreferenz und Zeitkonstitution zur Semantik von
Massentermen und Pluraltermen und Aspektklassen*. München: Wilhelm Fink Verlag.
- Krifka, Manfred (1990) : Four thousand ships passed through the lock: Object-Induced
measure functions on events. In: *Linguistics and Philosophy* 13: Netherlands: Kluwer
Academic Publishers. 487-520.
- Krifka, Manfred (1991) : Massennomina. In: Armin von Stechow/Dieter Wunderlich
(eds.) *Semantik: Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung*.
Berlin: de Gruyter, 399-417.
- Krifka, Manfred (2013) : Measuring and Counting in the Nominal and in the Verbal
Domain. Handout. Workshop on Countability September 16-17, 2013. Heinrich-
Heine Universität Düsseldorf.
- Landman, Fred (2006) : Indefinite time Phrases, in situ Scope, and Dual-Perspective
Intensionality. In: Svetlane Vogelleer/ Liliane Tasmowski (eds.) *Non-definiteness
and Plurality*. John Benjamins, Amsterdam, 237-266.
- Larson, Richard K. (1998) : Events and Modification in Nominals. In: Devon Strolovitch
/ Aaron Lawson (Hrsg.) *SALT VIII*. New York: Ithaca, S. 145- 168.
- Löbel, Elisabeth (1986) : *Apposition und Komposition in der Quantifizierung:
Syntaktische, semantische und morphologische Aspekte quantifizierender Nomina im
Deutschen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Maienborn, Claudia (2011) Event semantics. In: Maienborn, Claudia et al. (eds.)
Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning, Band 1;Band

- Müller, Ana /Sanchez-Mendes, Luciana (2020) : Pluractionality: The Phenomenon, the Issues, and a Case Study. In: Daniel Gutzmann et al. (eds.) *The Wiley Blackwell Companion to Semantics*. John Wiley & Sons, Inc. doi:10.1002/9781118788516.sem134
- Pittner, Karin (1999) : *Adverbiale im Deutschen: Untersuchung zu ihrer Stellung und Interpretation*. Tübingen: Stauffenburg Verlag.
- Rothstein, Susan (1995) : Adverbial quantification over events. In: *Natural Language Semantics*. Bd. 3 (1) , 1-31.
- Tovena, Lucia M./Khim, Alain (2008) : Event internal pluractional verbs in some Romance languages -Event internal pluractional verbs in some Romance languages-. In: *Recherches linguistiques de Vincennes*. 37. 9-30
- 筒井友弥 (2009) 『心態詞の意味と機能の研究 - mal を中心に -』博士論文 広島大学。

(でじま・こうたろう 学習院大学人文科学研究科博士前期課程)

Quantifizierung von Ereignisnomina durch die Adverbiale mit *Mal/mal.*

-Gelegenheit als Beispiel eines ereignisbezogenen Wortes-

Kotaro Dejima

Das Ziel dieser Arbeit ist es, den Unterschied zwischen den beiden unten gezeigten Sätzen zu klären.

- (1) a. Für die Bürger gibt es gleich dreimal **Gelegenheit**, sie bei Podiumsdiskussionen miteinander zu vergleichen.
- b. Für die Bürger gibt es gleich drei **Gelegenheiten**, sie bei Podiumsdiskussionen miteinander zu vergleichen.

Wenn etwas mehrmals passiert oder man etwas mehrmals tut, kann man dies auf Deutsch auf zweierlei Weise ausdrücken: einmal mit einer Konstruktion des Kardinaladverbials *Mal/mal* (=2a) und einmal mit einer Numeralkonstruktion (=2b)).

- (2) a. Hans sprang **drei Mal**.
- b. (Hans machte) **drei Sprünge** (.)

Das Handlungsnomen *drei Sprünge* im Beispiel (2b) stellt ein Ereignis dar, das in (2a) durch die von dem Adverbial multiplizierte Verbphrase ausgedrückt wird und als ein Gegenstand zu betrachten ist. Bei (2b) wird das Nomen aber durch das Numerale quantifiziert. Im ersten Satz ist im Gegensatz dazu der ganze Satz oder die Verbalphrase durch das Adverbial quantifiziert. Gibt es überhaupt einen semantische Unterschied zwischen den beiden Beispielen? Die Antwort darauf lautet: Bei (2a) gelten die drei Ereignisse des Springens nur als konsequent, aber (2b) erlaubt zwei Lesarten: eine objektbezogene und eine ereignisbezogene. Dieser Art semantischer Unterschied ist an einem Beispiel mit

Appellativ (Beispiel (3)) erkennbar (Numeralkonstruktion).

- (3) Viertausend Schiffe liefen mit Material in den Hafen ein.

Hier lässt es sich so verstehen, dass es in einer objektbezogenen Lesart zumindest viertausend Schiffe existieren und bei der ereignisbezogene Lesart die Anzahl der Schiffe, genauer gesagt die Anzahl des Einlaufens der Schiffe, theoretisch weniger als viertausend sein kann.

Diesen Ansatz werde ich auf das Beispiel (1) an, das das Hauptthema dieses Aufsatzes ist. Die Situation sieht gleich wie im Beispiel von (2) aus. Aber die Struktur des Satzes ist bei (1a) noch komplizierter als bei (2a). Hier spielt *dreimal* (*drei Mal*) eine wichtige Rolle als eine Numerativkonstruktion, nicht als ein Modifikator der Verbalphrase oder des Satzes. Eine Numerativkonstruktion, wie *ein Kopf* (*Salat*) oder *zwei Schluck* (*Wasser*), ist eigentlich geeignet für eine Quantifikation der Nomina. Hier wird die gleiche Konstruktion, die hauptsächlich eine Verbalphrase oder einen Satz modifiziert, für die Modifikation des Ereignisnomens verwendet. Natürlich ist das oben genannte Beispiel nicht eindeutig, da es nicht klar ist, ob das Numerativ sich auf die Verbalphrase, den ganzen Satz oder auf das Nomen bezieht. Aber das wird in einer geraden Linie erklärt, wenn man annimmt, dass *dreimal* von (1) aus einer Numerativphrase entstand. Das nächste Beispiel zeigt deutlich, dass diese Annahme stimmt.

- (4) a. Nach **dreimal Bewährung** kann das Gericht kein Auge mehr zudrücken.

Die Numerativphrase *dreimal Bewährung* entsteht innerhalb der Präpositionalphrase. Dieses Beispiel zeigt, dass sich das Wort *mal* zumindest ähnlich verhält wie das typische Numerativ: Die ursprüngliche Struktur der Phrase würde, abseits der orthographischen Regel, so vorgestellt werden: „drei + mal + Bewährung“.

Was mit dieser Konstruktion im Vergleich mit der Zählkonstruktion gemeint ist, wird durch die „Form“ des Bezugsnomens ausgedrückt. Von der Zählkonstruktion kann man nur ablesen, dass es einige Ereignisse (oder natürlich auch Entitäten) gibt. Aber die

Numerativkonstruktion stellt die Bestimmung der Form der Nomina in den Vordergrund.